

夢よ叫べ

ボブ・ディランがノーベル文学賞を受賞し、シンガー・ソングライターの表現がアカデミックな場で芸術として認められたことは大いに喜ぶべきことであらうが、一九六〇年代に思春期を迎え、フォークソングやロックに救われてきた自分としては「今頃になって？」と思わなくもない。

中学生の頃に初めて耳にしたディランの作品は、本人の歌声ではなくカバーで、ピーター、ポール＆マリーの「風に吹かれて」や、ジミ・ヘンドリックスの「オール・アロング・ザ・ウォッチタワー」、岡林信康の「戦争の親玉」などで、実はディランのオリジナルより好きだ。

声や演奏の好み……と言ってしまうえばそれまでなのだが、どうやら「なんとか自分のものになりたい」という表現者たちの姿勢に惹かれていたような気がする。

一九六〇年代といえば、敗戦国日本は連合国イギリスやアメリカの経済状況になんとか追いつき、追い越そうと必死だったと思えば、カルチャーやフォーク、ロックシーンにおいても同様で、欧米の

様相になんとか似せようと躍起になっていた。あの時代の熱さが懐かしく感じられるのと同時に、けれどシニカルな微笑みも浮かんでくる。

明治維新の開国時と変わらない日本という国の海外文化の取り入れ方。いや、欧米であれアジア近隣の大国であれ、古来よりその外観に囚われる姿は今も変わっていないように感じられる。

けれどその一方で、外観に惑わされることなく、海外から渡来する感覚の本質を捉え、この地形と気象、身体に呑み込む力も強く感じる。戦後の日本企業の躍進は、そうした海外コンプレックスをいち早く撥ね退けていて、むしろ文化の方が日本国内のアカデミズムにがんじがらめになっていたのかもしれない。

だからこそ、その呪縛から解き放たれた音楽、ファッション、アート、写真、演劇などが一九六〇年代に噴出したのだろう。

だが、時世は変わり続ける。結局、いつも振り出した。

そんな中、ディランをも吹き飛ばすシンガー・ソングライター……いや、純音楽家が日本にいて、当時からその姿勢を変えることなく貫いている。

遠藤賢司。

彼の「夢よ叫べ」を聴けば、今も、思春期と同様に彼の歌声に救われ、励まされるのだ。



1955年、鳥根県松江市出身。75年に、劇団「シェイクスピア・シアター」に創設メンバーとして参加。80年、唐十郎主宰の「状況劇場」に移り、84年まで在籍。86年に林海象監督の映画「夢みるように眠りたい」で主演デビュー。92年、テレビドラマ「ずっとあなたが好きだった」の冬彦役で一躍注目を浴びる。TVドラマ、映画、舞台等で幅広く活躍中。小泉八雲の朗読をライフワークとしている。